

宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察 －初期の誌面の変化を中心に－

A Study on the Magazine *SUTAIRU* edited by Uno Chiyo
－Focusing on changes in the magazine from Volume 1, Issue 1 to Issue 7－

松尾量子

『スタイル』は、1936（昭和11）年6月に、宇野千代（1897－1996）によって編集発行された雑誌である。本稿では、創刊号から1936（昭和11）年12月発行の第1巻第7号までの『スタイル』について、誌面の変化を検証することで、『スタイル』の編集方針が整えられてゆく過程を確認した。

SUTAIRU is a magazine edited and published by Chiyo Uno (1897-1996) starting in June 1936. In this paper, we examined the changes in the magazine from the first issue to Volume 1, Issue 7, and confirmed the process by which the editorial policy of *SUTAIRU* was prepared.

1 はじめに

『スタイル』は、1936（昭和11）年6月に、小説家宇野千代（1897－1996）によって編集発行された月刊雑誌である¹⁾。『スタイル』創刊のきっかけについて、宇野は後年、「或る人と話してある間に、女だけが読むお洒落雑誌のやうなものをやったら面白い」という話が出て、実現したと回想している²⁾。『スタイル』には、写真グラビアによる欧米のファッション情報、きものや化粧、男子服、映画、スポーツその他お洒落な生活全般に関する記事や随筆、小説、芸能記事等が掲載されており、「この時代としては例外的に、これは遊び心豊かなお洒落雑誌」であったと評されている³⁾。

『スタイル』は刊行時期によりⅢ期に分けられ、第Ⅰ期にあたる創刊号から1941（昭和16）年9月発行の第6巻第9号までの64冊については、2003年に臨川書店により復刻版が刊行され、総目次と執筆者別索引が作成されている。本稿では、この復刻版を資料として、創刊号から1936（昭和11）年12月発行の第1巻第7号までの『スタイル』について、誌面の変化を整理することで、当時の日本の衣生活における「和装と洋装の拮抗した状況を、多くのエッセイと画像データによって見事に遺すことになっ

た」⁴⁾と評された『スタイル』の編集方針が定まってゆく過程を検証する。なお、初期の『スタイル』は、目次の掲載がなく、また第1巻第4号までは、頁番号が振られていない。その後もグラビア頁には頁番号が記載されていないため、本稿における『スタイル』の引用についての頁表記は、『別冊 総目次と執筆者別索引』（臨川書店2003年）による。

2 先行研究

『スタイル』に関する先行研究としては、笹尾佳代による「宇野千代における〈装い〉の意味－雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって－」（『国文学論叢』第五十六輯 2011年）がある。笹尾は、『スタイル』創刊号のファッション・グラビアの編集方針と同時期の宇野自身の自己表象の考察により、1936（昭和11）年3月に刊行された『あいびき』の表題作「あいびき」におけるパフォーマンス的な〈装い〉を導いている⁵⁾。藤堂友美は戦時下のメディア統制下における雑誌刊行の戦略という視点から、第Ⅰ期『スタイル』を3期にわけて、その誌面変化と寄稿者についての分析を行っている⁶⁾。高瀬真理子は、筆者陣や「編輯後記」に注目し、創刊から1937（昭和12）年までの『スタイル』の変

遷を整理している⁷⁾。服飾研究の立場から『スタイル』を取り上げたものとしては、青木淳子による「雑誌『スタイル』初期にみる宇野千代のきもの美意識」（『語学教育研究論叢』第34号、2017年）をあげることができる。青木は、創刊号から1937（昭和12）年6月号（第2巻第6号）までの和装関連記事を抽出し項目別に分類することで、戦後、着物デザイナーとしても活躍することになる宇野千代のきもの美意識が、『スタイル』誌上において確立したと推察している⁸⁾。

『スタイル』は、宇野千代の個性に惹かれた文学者や美術家から芸能関係者まで、多彩な執筆陣によるお洒落や流行に関する随筆や記事の特徴としている。宇野自身は、創刊時から日本版『ヴォーグ』を意識していたようであるが、当時の日本には今日言うファッション誌という概念はなく⁹⁾、婦人雑誌には実用的な洋装記事や洋裁技術に関する記事が掲載されるのが常であった。石川綾子は『日本女子洋装の源流と現代への展開』の中で、戦前の洋装や洋裁に関する雑誌について、専門家向けの雑誌と一般家庭向けの婦人雑誌の二系統にわけて考察を行っているが¹⁰⁾、『スタイル』についての言及は見られない。近年のファッション誌についての論考では、ファッション誌の定義そのものが検討されるようになり、『スタイル』についての言及もなされている¹¹⁾。

3. 1930年代半ばの洋装・洋裁雑誌と『スタイル』

1920年頃から、生活改善として洋装が推奨されるようになり、婦人雑誌には、家庭で手軽に洋服を作るための製図や洋裁独習実用的な記事が掲載されるようになる。1930年代には、『婦人倶楽部』『主婦之友』のような実用型婦人雑誌だけではなく、『婦女界』『婦人公論』『婦人画報』といった教養型の婦人雑誌にも実用的な記事が掲載されるようになり¹²⁾、洋装や洋裁に関する雑誌が相次いで創刊された¹³⁾。この時期は、「日常洋装についての大衆の学習期」とされ、一般の人びとが洋装を学ぶ手段は、銀座などで街ゆく先端の洋装姿を目にしたたり、映画や雑誌のグラビアページに目をこらすことであったと考えられている¹⁴⁾。

『スタイル』創刊の前年、1935（昭和10）年9月には、『ル・シャルマン』が創刊されている。1935（昭和10）年8月31日の『朝日新聞』に掲載された

『ル・シャルマン』創刊号の広告には、「服飾と手藝の美しい新雑誌が出ました」というコピーが記されている¹⁵⁾。『ル・シャルマン』は、『ヴォーグ』や『ジャルダン・デ・モード』を目指した雑誌であったとされ、「洋服に関わる啓蒙的な記事」と田中千代や杉野芳子などによる洋服のデザインとパターンの紹介、洋裁技術についての記事や手芸関連の記事が掲載されており、井上雅人は、『ル・シャルマン』について、「洋服の着方に正しさを想定し、それを啓蒙していくことをファッション誌の機能のひとつと考えるのであれば、その萌芽」を見ることができると指摘している¹⁶⁾。

今和次郎は、『ル・シャルマン』創刊号に「板に付いた洋装」という文章を寄せ、スタイル・ブックや流行雑誌が「このごろめっきりふえて、また安定的な刊行物になったかの観がある」と記している。そして街には「このごろ興隆のポピュラーなスタイル・ブックのページ」から抜け出た婦人たちが多く見られる一方で、「少し先端的な姿だなどと思う人びとの装いは、西洋の高級流行雑誌を月遅れにでも注意している人びとだと判定される」と述べている。¹⁷⁾

今は、1937（昭和12）年4月にスタイルブックには鑑賞向きのものと実用的なものの二種類があるとして、鑑賞向きのものの例として『ヴォーグ』をあげ、『ジャルダン・デ・モード』を実用と鑑賞を兼ねたものとしている。そして、日本ではスタイル・ブックがあまり多くなく、「鑑賞向きのやや高級なものとして宇野千代さんの『スタイル』があるぐらいでしょう。」と述べている¹⁸⁾。

4. 『スタイル』の創刊

『スタイル』の創刊について、宇野千代は、後年、以下のように回想している。

或る人と話してある間に、女だけが読むお洒落雑誌のやうなものをやったら面白い、と言ふ話が出ました。雑誌をやるなどと、一度でも考へたことがあるでせうか。飛んでもない、と言ふのもとに打消してしひさうなこの話に、私は乗気になりました。信じられないことですが、この話は実現しました。

・・・（中略）・・・雑誌の名は「スタイル」とつけました。その頃、「スマイル」と言ふ眼薬があって、大当りに当たってゐたのです

から、それをもちってつけたのです。私は自分の仕事である小説を書くこともあと廻しにして、「スタイル」のためのお洒落記事を書きました。コントと言ふ短い形式の小説も書きました。仲間はずきに集まりました。その頃、パリから帰って来たばかりの藤田嗣治に、表紙を描いて貰いました。

仕事と言ふものは、まづ、何かに手をつけると、その一つのことから、思ひもかけない、その次ぎのことが始まります。若い男が二人、女が一人、私を手伝ってくれました。忽ち、緞子のカーテンをかけた豪華な部屋は、編集室になりました。・・・(中略)・・・薄い、しかし大判の、きれいなグラビヤ雑誌が出来上がったのは、何でも、この話が始まってから、二ヶ月くらゐ経った頃のことでした。何のことはない、これで、私は、この小さな玩具のやうな雑誌社の女社長になったのでした。¹⁹⁾

この回想記から、自宅を編集室として、急ピッチで創刊作業が行われたことがわかる。創刊号の「編輯後記」では、発行が遅れたお詫びに続いて「出来る丈新しい写真をとると思つてネバつての結果なのですから。」といひわけをした上で、「内容も今度は残念ながらあまり威張れません。来月からは何かの特輯方針をとる事にし、取りあへず、水着で行かうかと思つて居ます。」²⁰⁾と記されており、編集方針が手探りであったことがわかる。しかし、第2号の「編輯後記」では、「創刊号の予想以上の好成績に一同勇躍して第2号にとりかかつたのである」²¹⁾とあり、第3号では「つらいもつらし面白し、すつかり『出版業』の魅力のトリコになつてつい本業の『著述業』がお留守になつては、同業の編輯者の方にお叱言を喰ふ始末です。」²²⁾と、雑誌編集にのめり込んでいく様子を伺うことができる。『スタイル』創刊の頃にスタイル編集室で撮影された写真には、『スタイル』の誌面に見られるやうなお洒落な装いをした宇野千代の姿を見ることができる。(図1)

5. 『スタイル』の誌面

1) 第1巻第1号〔1936(昭和11)年6月1日スタイル社発行]

『スタイル』創刊号は、総グラビヤ32頁である。



図1 『スタイル』編集室の宇野千代 1936(昭和)11年 (図版出典：山梨県立文学館『宇野千代の世界』1996年、p.33)

表紙画は藤田嗣治によるもので、黒地に二人の横向きの女性の姿が描かれている。グレーの地に赤字で大きく書かれた題字は東郷青児による。表紙の右下には赤字に白抜きで「宇野千代編輯」と記載されており、価格は20銭である。

巻頭グラビヤは、「朝」と題されたマレーネ・ディートリッヒの写真である。キャプションには、「マダムのものういお目覚めです。白いサテンのパジャマの上に羽織つた目の覚める様なガウン。黒のヴェルヴェットに唐草模様風の飾りを白のコードで現はしたもの。真珠色のお部屋をつくつて、その中にそつとしまつて置きたいフランス人形を思はせませす。」とある²³⁾。続いて「10.A.M.」「スポーツドレス」「スポーツ」と見開きのグラビヤ頁が続き、藤田嗣治らの随筆頁を挟んで、再び「午後」「夜風に薫る」「くつろぎ」とグラビヤ頁が置かれている。

『スタイル』創刊号は、「編輯後記」に「内容は残念ながらあまり威張れません。来月からは何かの特輯方針をとる事にし」²⁴⁾とあるように、海外から届いた写真を何とか組み合わせたと印象

を否めない。しかし、一日の時間帯に応じて衣服を着替えるという欧米のライフスタイルをハリウッド女優の写真によるグラビアで紹介するという編集は、当時の他誌には見られないものであった²⁵⁾。この他、矢野目源一²⁶⁾による海外デザイナーの紹介、原奎一郎²⁷⁾による男子服に関する「洋服第一課」などが掲載されている。『スタイル』は、宇野千代の個性に惹かれた文学者や文化人、芸術家、芸能関係者まで、幅広い執筆陣を特徴としており、和田博文は、『スタイル』について、「文学者や画家がファッション・化粧について語る興味深い雑誌となった」²⁸⁾と評している。

創刊号からの企画として興味深いのは、アンケート形式で愛用の化粧品などについて質問する「お洒落問答」である。創刊号では、以下の3つが問われており、宇野千代本人や藤田嗣治を含め、35名が解答している。

1. あなたはどちらの洋服屋さんで洋服をお作りになりますか？
2. Best-dresser (ベストドレッサー) をご推薦下さい。

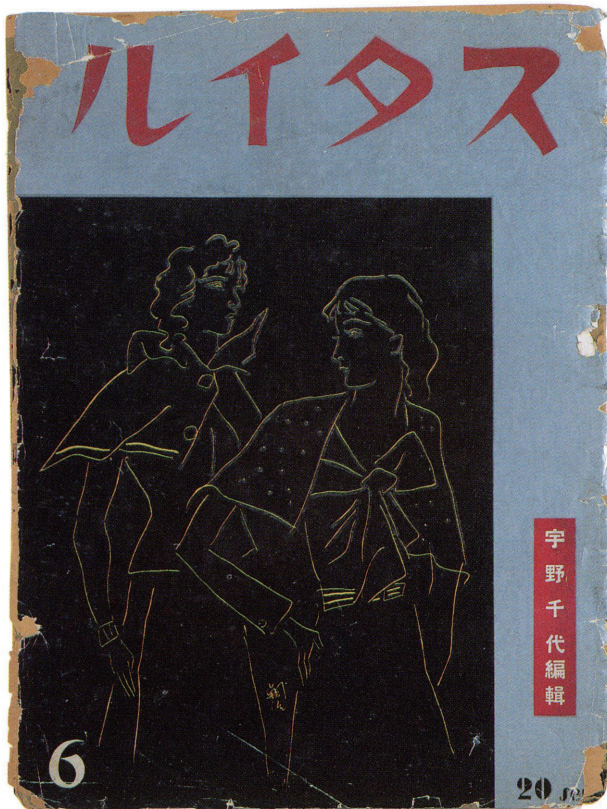


図2 『スタイル』第1巻第1号表紙
(図版出典：山梨県立文学館『宇野千代の世界』
1996年、p.33)

3. あなたの御常用の口紅の会社名と色をお知らせ下さい。男の方は、御常用のカミソリの種類と会社名を

「お洒落問答」の回答者の多くは、『スタイル』の寄稿者であり、編集者と寄稿者が一緒になって、お洒落な生活とは何かを考える企画であったと思われる。

2) 第1巻第2号 [1936 (昭和11) 年7月1日 スタイル社発行]

第2号は、40頁に増量されており、内訳は、32頁のグラビアに8頁のオフセット頁である。表紙画は藤田嗣治であり、表紙の上部には、「お洒落画報」と記載されている。頁の増量については、「編集後記」で、創刊号の「聊か単一に過ぎたキラヒを多少なり、修理出来たかと思ふ」と記されている²⁹⁾。

第1号で予告された通り、第2号では水着の特集が組まれており、巻頭グラビアは、「潮風」と題され、ジーンズ姿でセーリングの準備をしている女優クレア・トレヴァの写真である。キャプションには、「海面を静まりかへらせて居た朝霧もはれて、今日一日のセーリング日和を約束して呉れる風が吹いて来た様子です。華やかなバンダナ・チーフのブラウスに潮風を一杯にはらませて、船出のお支度！」とある³⁰⁾。続く見開き頁には、ビーチガウンや水着姿のハリウッド女優の写真が見られ、「浜の展望台」「ビーチウエア」「散歩服」「七月の日課」「ばあてい」と題されたグラビア頁が続く。

第2号からは、「飾窓」という服飾雑貨やインテリアの紹介頁が加わると共に、『スタイル』が独自に撮影した日本人女性の写真が掲載されるようになる。洋装は、福島慶子³¹⁾、和装は宮川曼魚³²⁾令嬢静子である。撮影は、当時婦人雑誌等で人気を博していた福田勝治である。

また、読者からの希望を反映させる形で、宇野千代の小説「雨に濡れてみた扇」が掲載されている。森田たま³³⁾による和装に関する記事の掲載と、「みをつくし」という和装に関するコーナーが始まる。第2号の「みをつくし」には、宇野千代による「夏の和装のご注意」が掲載されており、この中で「私の得意な異国趣味」として高島屋で見つけた広幅のカーテン地で作った帯の写真が掲載されている。

この号には、赤羽喜一³⁴⁾画と署名のある2枚のド

レスのデザインが掲載されている。デザインの特徴とおすすめの素材について記したキャプションが付いており、洋装店でのあつらえが想定されている。デザイナーが誰であるかは不明であるが、第4号以降、『スタイル』は、推奨衣裳としてオリジナルデザインを提案するようになるため、その準備としての試みであるとも考えられる。

「お洒落問答」の問いは、「1. 御常用のシャボンはなんですか?」「2. ベッドでおやすみですか? タタミにおやすみですか?」「3. あなたの理髪店(美容院)はどこですか?」であり、回答者は44名である。この号から男物の服地に関する記事や「伊達男短信」が掲載されるようになる。また、社告として「スタイル第3号よりの分担編集者-御紹介-」が掲載されており³⁵⁾、宇野千代は和服の担当となっている。「編輯後記」では、第3号で業界初の「対向面分担編輯」を試み、一つのテーマを見開き2頁に、写真6、記事4の比率で収めると予告しており、宇野は「思ひ通りに進行すれば、ナカナカ面白い雑誌になると思ふ」³⁶⁾と記している。

3) 第1巻第3号〔1936(昭和11)年8月1日 時事新報社発行〕

第3号からは、時事新報社の発行となり、発行部数が2倍となる。頁数は40頁のまま、総グラビア印刷となっている。「編輯後記」には、48頁への増量を想定したが、思い通りにはいかず、現状維持となったことが記されている。第2号で予告された「対向面分担編輯」についてのコメントは見られない。表紙画は藤田嗣治で表紙右側には「盛夏特輯号」と記載されている。

巻頭グラビアには、ハリウッド女優に代わり、日本人女性の写真が使われている。モデルは、パリでの生活が長く、藤田嗣治らの支援者であった薩摩次郎八夫人千代子である。薩摩千代子はフランス版『ヴォーグ』に何度も登場している。巻頭グラビアのキャプションには「お客様を迎へてサロンの階段へ下り立たれた薩摩千代子夫人」とある。巻頭グラビアの後には、「そあれ」「真夏の太陽」「プロムナード」と題されたハリウッド女優の写真による海外ファッションの紹介が続き、再び薩摩千代子の写真が2枚掲載されている。巻頭グラビアで薩摩千代子が着用しているのは、上野広小路のカナメヤで仕立てられた黄色に花模様のついたオーガンジーのド

レスである。残りの2枚の写真には、同じくカナメヤ製のアフタヌーンドレスとパリで仕立てたパジャマドレスを着用した姿を見ることが出来る。

第3号では、「深水に夏ものを訊く」という企画がなされ、伊東深水推奨の柳橋の芸者榮美子の写真が見開きで掲載されている。これは、「対向面分担編輯」を意識したレイアウトである。以後、芸者の写真は毎号掲載されることになる。また二科会所属の画家仲田菊代の和装写真が掲載されている。撮影者はどちらも福田勝治である。和装の頁には、グラビア写真とは別に着物を着慣れていない文化学院女子部3年生の山根壽子の夏の着物姿の写真が掲載されている。第3号からの分担編輯により和服は宇野自身の担当であった。芸者から女学生までの和装姿が同時に掲載されたことは興味深い。

「お洒落問答」は、以下のように、1と2については、男女別の設問となっている。回答者は、男性22名、女性20名である。

1. 男が香水をつけたの好きですか?
女が爪を深紅に染めたのは好きですか?
2. 男のノー・ネクタイどうお思ひですか?
女のノー・ストッキングをどうお思ひですか?
3. フォードとシボレー、どちらが好きですか?

巻末には、松井翠聲³⁷⁾が「夏は運動着から」という短文を掲載しており、唐草模様の風呂敷2枚で作る水着を提案しており、風呂敷やボタンなど付属品の値段が掲載され、材料費は合計1円4銭と記されている。

4) 第1巻第4号〔1936(昭和11)年9月1日 時事新報社発行〕

第4号は、第3号と同じく40頁である。巻頭グラビアは、女優の桑野通子、撮影は福田勝治である。桑野は第1回スタイル推薦衣裳である紺地に白の縞を抜いた広幅の手織り銘仙によるイブニングドレスを着用している。最終頁に掲載された写真から背中を大きく開けたデザインであったことがわかる。布地提供はミラテス(銀座)、制作は水町洋装店(赤坂)である。阿部ツヤコ³⁸⁾は「デザインは宇野さんと二人で知恵をしばつて考へ出したものですが、なかなかいいでせう。これも自慢の一つにしたいのです。この試みはこれからも毎月続けて行く考へです。

日本のきれを洋服に使つたりクラシックなものを現代的に生かしたり、やつてみたいことが沢山あります」と「編輯後記」に記している³⁹⁾。

この巻頭グラビアに続いて、ハリウッド女優の写真による「秋に咲く」「お嬢さまお出かけ」「月夜」といったグラビア頁が置かれている。この号には、銀座クローヴァー洋装店の小澤静枝による秋の流行についての紹介記事が掲載されている。また、「-日本版-デザイナの横顔」というコラムでは、小澤静枝、中島要、山脇敏子、伊東茂平、田中千代、ドロシー・エドガーズの6名が取り上げられている。この他、ジャン・パトゥのイヴニングドレスを着た関西社交界の野村小夜子の写真やアフタヌーンドレスを着た水野葉子の写真、女優入江たか子の散歩服姿の写真が掲載されている。

和装には福田勝治撮影の芸者の写真グラビアを含め6頁が割り当てられている。舞踊家花柳寿美の「初秋の和服を語る」や森田たまの随筆に加え、宇野千代創案のつづれ織り格子柄の着物と第2号に掲載されたカーテン地の帯が写真つきで9月の装いとして提案されている。

興味深いものとして、写真家福田勝治による「レンズを鏡に! - 写真とお化粧 -」という記事をあげることができる。これは実際にモデルの化粧を変えて撮影した写真により、化粧が写真写りに大きな影響を与えることを語るものである。撮影日時、天候に加え、使用したレンズ、フィルター、露出、現像液、印画紙の情報が記載されている。

また、この号から読者からの質問に答える質問欄「Q et R」⁴⁰⁾が新設されており、10の質問に対する回答が掲載されている。男子服、女性の装い、美容、その他一番よく売れる外国流行雑誌とスタイル・ブックのベスト3についての質問があり、丸善外国語雑誌課による回答によると、流行雑誌については、1位『ジャルダン・デ・モード』、2位『ハーパース・バザー』、3位『ヴォーグ米国版』、スタイル・ブックについては、1位『ル・シック・パルフェ』、2位『ラ・ファム・シック』、3位『ヴォーグ・パターン・ブック』である⁴¹⁾。この問いは質問者が(H・B)となっているため、編集部によるものと推測できるが、『スタイル』の編集に際して、これらの雑誌が参考にされていたと思われる。

「お洒落問答」は、「1. 和装、洋装を通じて、一

番お好きな布地はなんですか?」「2. 寝床の中で本をお読みにになりますか?」「3. 犬はお好きですか?お嫌いですか?」であり、回答者は35名である。

巻末には、「編輯後記」と共に、高島屋婦人服部のドロシー・エドガーズによる「絹麻一反で作った洒落たドレス」が掲載されている。

5) 第1巻第5号 [1936 (昭和11) 年10月1日 時事新報社発行]

第5号は、グラビア32、活版16の48頁となる。巻頭グラビアは、女優の入江たか子であり、初めて和装の写真が使われている。名越辰雄による撮影は吉屋信子邸で行われ、吉屋は「美女譚」と題した短文を寄せ、「鎬木清方が描ける如きその姿よ。黄八丈に黒の襟、帯、黒塗りの下駄、青きは一つ、君が匂ふ黒髪を翡翠の簪の玉なりき」⁴²⁾と記している。続くグラビア頁には、「秋風に乗って」やカレッジガール、イヴニングドレスの写真が掲載されており、新たにコドモの頁が設けられている。

巻頭グラビアに和装が使われていることに加え、和装に関する頁には、巻頭グラビアと呼応するように、明治時代の風俗に装った14才の河野綾子の写真が掲載されている。また、宇野千代の「新しい日本の着物」が掲載されており、「楽しみのために着るニホンのキモノ」という考えが述べられている⁴³⁾。

洋装は頁数は少ないが、女優のスナップ写真が掲載されている。巻末には、ドロシー・エドガーズによる「スポーツ・ウエア」のデザイン画とドレスメーカー女学院の杉野芳子による「スワガー・コート」のデザインと製図が掲載されている。「スワガーコート」は、1930年代に流行した肩が張り後身頃のフレアーにより、裾に向かってゆるやかに広がる七分丈のコートで、杉野は「美しいウエイストの持ち主が少ない日本人には、スワガーの方が楽に着こなせます」と述べている⁴⁴⁾。杉野による製図は、作図方法が記載されているものの、洋裁の専門知識を前提としたものである。『スタイル』には、これ以外に製図は掲載されていない。

この号からは、グラビア以外の頁には頁番号が記載されるようになり、18頁から31頁までは、岡本一平による「婦人の服装漫談」など読み物の頁が続く。「編輯後記」には、読み物を多くという読者の要望により、増やしたところ、盛りだくさんとなり、誌面が不足したと記されている。この頃から、「編輯

後記」は巻末には置かれなくなっており、掲載記事が盛りだくさんになる中で、誌面のやりくりで苦心していたと推察できる。

「お洒落問答」は、「1. 何時間お寝みになるとピンとします? (お昼寝はなさいますか?)」「2. 朝刊は先づ第一に何面をお読みになります? (習慣的なお順序をお知らせ下さい。)」 「3. コーヒーはドコ産のものが好きですか? (喫茶店ではドコのコーヒーが一番でせう?)」であり、回答者は44名である。

第4号から始まった「Q et R」は17件掲載されているが、洋装や和装、化粧に関するものは少なく、音楽や映画スター、野球に関するもの、家や車など幅広い質問が寄せられている。

6) 第1巻第6号 [1936 (昭和11) 年11月1日 時事新報社発行]

第6号からは、表紙画が赤羽喜一に代わる。藤田嗣治による表紙画は、妻のマドレーヌと思われる横顔の女性を描いたものであったが、赤羽の表紙は、黄色の地に女性用の手袋と口紅を描いたものである。「編輯後記」には、「思ひ切つて表紙を変へて見た。筆者は新進、赤羽喜一氏である。何分の御高評を得たいと思ふ」⁴⁵⁾とある。

巻頭グラビアは、舞踊家の崔承喜であり、撮影は名越辰雄、ドレスは、スタイル推薦衣裳の第二で、紺地に細かい十字緋の広幅手織銘仙のアフタヌーンドレスである。続いて、「そとで」「柊林ベストドレスサー」或る日愉しく」「土曜日の朝」といったハリウッド女優の写真によるグラビア頁が続く。

第6号で新たに設けられたのは、「せによりた」というコーナーである。これは今日のストリートスナップに類するもので、5名の写真が掲載されている。撮影には苦労したようで、第7号の「編輯後記」には、「各方面から好評だった」こと、街頭や劇場で声をかけて撮影を依頼していることが記されている⁴⁶⁾。

この号は、舞踊家の崔承喜が巻頭グラビアに起用されていることもあり、音楽や映画、芸能に関する記事が充実している。創刊号以来続いていた「お洒落問答」は、休止されている。「編輯後記」には、休止の理由について、「『問』に窮した譯でもないが、半年間同じやうな内容で續けるのも智慧がなさ過ぎるし、質問筐の方がぐんぐんと充実して来たからである。」⁴⁷⁾と記されている。「Q et R」は、誌面のやりくりの関係もあり、ジャンル分けをして分

散掲載されており、「流行・その他」「美容・その他」は21頁に、「雑」「音楽」「男」は32頁に掲載されている。最も数が多いのは、「美容・その他」である。「雑」に分類されている中に、洋裁の独習書についての質問とデザイナーになるにはという質問があり、伊東茂平が回答している。また、第4号の「Q et R」に掲載された海外の流行雑誌について、九州在住者から入手方法を知りたいという質問が掲載されており、丸善が回答している。

第6号は表紙が変わり、「お洒落問答」が休止となり、「せによりた」が始まるなど、いくつかの変化が見られる号である。一方で和装や男子服に関する頁には、大きな変化は見られない。「編輯後記」の最後には「和洋両棲が一番らしい。今日は和服、明日は洋服といふところに、からりからりと變る気分の愉しさがある」と記されている⁴⁸⁾。

7) 第1巻第7号 [1936 (昭和11) 年12月1日 時事新報社発行]

第7号の表紙画は、引き続き赤羽喜一が担当している。「編輯後記」によると、第6号の表紙変更は、好評であったようで、「恐る恐る表紙を変へて見たら、予想外の大好評だった。山の手、下町の区別無く、誰にでも分かつて貰へたらしい」と記されている⁴⁹⁾。第7号の表紙には、クリスマスを意識して、靴下と化粧品が描かれている。

巻頭グラビアは、女優の純英子、撮影は名越辰雄である。紺ベルベットのボレロ付きのソアレは、スタイル推奨衣裳3である。続くグラビア頁は「柊林ベストドレスサー」「Xマスイヴ」「ファーエレガンス」と続き、クリスマスプレゼントとしてのアクセサリー頁を挟んで、「春遠からじ」「冬の日は」と海外ファッションの紹介が行われている。「せによりた」には6名の写真が掲載されている。

随筆など読み物の頁の後には和装の頁が置かれており、宇野千代のデザインした和装姿の女優桑野通子の写真が掲載されている。キャプションによると、着物は、黒の変わり織りクレープの花模様のプリントのついた洋服地を仕立てたもので、デッキチェア用の黄色と紺色の太い縞柄の帆布による帯を組み合わせている。宇野は「新しいキモノは、何でも。-あなたのお好きな布地で、どうぞご自由に。」とキャプションを結んでいる⁵⁰⁾。

「Q et R」は、見開きで掲載されており、内容は、

洋装に関連する質問9、和装について1、男子服関連6、美容関連4、ハリウッド俳優関連6、その他スポーツ関連や『スタイル』誌上に掲載されている芸者のことなど多彩である。洋装関連では、帽子的合わせ方や流行に関する質問が主である。

「編輯後記」には、創刊号以来の試行錯誤が次のように記されている。

この半年、狭苦しい誌上であれやこれやと、めまぐるしいほど色々なことをやつて見たが、漸く、一落着きといふところである。當分の間は三二頁のグラビアを洋装に一六、男ものに四、和装に八、お化粧に四といふ風に割當てて行きたいと思ふ。他は活版頁をユウヅウして、何とかやつて見ることにする。⁵¹⁾

この他、創刊からの半年余りを振り返り、創刊号以来の紳士服に関する記事が評判がよいこと、今後はこれまでの英国紳士服に加え、アメリカの実用中心の男物の頁も加えることなどが記されている。

6. 誌面から見る『スタイル』の変化

表1は、臨川書店による『スタイル』第I期復刻版と『別冊 総目次と執筆者別索引』を参照して、創刊号から第1巻第7号までのグラビアについて、タイトルやモデルを一覧にまとめたものである。創刊号から第1巻第7号までの7冊を通して見ると、海外ファッション情報の位置づけの変化に気づく。創刊号は手探り状態でのスタートであったこともあり、内容は海外から届いた写真を何とか組み合わせたと感じる感強いが、藤田嗣治の表紙画と東郷青児の題字からなる表紙と、「朝」「10.A.M」「スポーツドレス」といった一日の時系列にそって着用場面が設定されたストーリー性のあるグラビアは、これまでにない新しさを期待させるものであった。『スタイル』は、洋服の作り方や着用の仕方を伝えることを目的とした当時の洋装・洋裁雑誌とは異なる「お洒落雑誌のようなもの」⁵²⁾を目指してスタートした。

第2号では、総頁が創刊号の32頁から38頁となり、海外ファッション情報に割かれる頁数はそのままであったが、日本女性をモデルとした写真や和装関連の記事や小説が加わり、日本版の『ヴォーグ』としての試行錯誤が始まる。巻頭グラビアは、表紙と共

に雑誌のイメージを強く作用するが、『スタイル』では、創刊号と第2号はハリウッド女優の写真が使われており、第3号からは日本人女性を撮影した写真が使われた。第3号の巻頭グラビアは、フランス版『ヴォーグ』に登場したことがある薩摩千代子で、フランス仕込みのハイ・ファッションの着こなしが提示されている。第4号以降、巻頭グラビアは、スタイル推奨衣裳など、『スタイル』のメッセージを強く提示する場となり、モデルには女優や舞台関係者が起用された。第4号では、第1回スタイル推奨衣裳を纏った桑野通子、第5号では鍋木清方風に装った入江たか子、第6号は崔承喜、第7号は純英子がスタイル推奨衣裳を着用している。

第1巻第7号の「編輯後記」によると、『スタイル』の売り上げは、第5号頃から伸びており、第6号は品切れの書店が出たとされている。第5号は巻頭グラビアが鍋木清方風に装った女優の入江たか子であり、読み物が増加した号である。また『スタイル』としては例外的に製図の掲載やこども服の頁が見られる。表1からわかるように、創刊から第7号まで、海外ファッションを紹介するグラビアの編集方針には大きな変化は見られない。しかし、他のグラビアが増加することで、雑誌としての印象は大きく変わる。特に、第5号以降は、頁数が増し、前半はグラビアを中心とした海外ファッション情報と洋装、読み物頁をはさんで和装や化粧、映画や音楽、演劇、男物の頁が置かれている。第6号からの表紙の変更は、『スタイル』の方向性が新しい段階に入ったことを示すもので、第7号の「編輯後記」には、創刊以来の誌面についての試行錯誤がひとまず落ち着き、グラビア頁についての編集方針を定めたことが述べられると共に、残りの活版印刷頁により、新たな試みを続けると述べられている。

7. おわりに

本稿では、『スタイル』に関する研究の第一歩として、創刊号から第1巻第7号までの誌面の変化を検証し、『スタイル』の編集方針が定まっていく過程を確認した。今後は、第2巻以降を含めた『スタイル』の誌面変化や掲載記事についての検証により、日本人の衣生活の主体が、和装から洋装へと移行する過程における服飾についての新たな見解を得たいと考えている。

- 1) 『スタイル』は、1941(昭和16)年9月まで刊行されたが、戦時体制により、他誌との統合が行われ、『女性生活』と改題して1944(昭和19)年1月まで刊行が続けられた。戦後は、1946(昭和21)年2月に復刊し、1950年代半ばには発行部数が12万部となったが、スタイル社の倒産により、1959(昭和34)年5月号をもって廃刊となる。
- 2) 宇野千代『私の文学的回想記』中央公論社、1972年、p.91.
- 3) 高橋晴子『近代日本の身装文化 「身体と装い」の文化変容』三元社、2006年、p.117.
- 4) 前掲書、p.117.
- 5) 笹尾佳代「宇野千代における〈装い〉の意味－雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって－」、国文学論叢、第五十六輯、2011年、pp.34-47.
- 6) 藤堂友美「第一期『スタイル』刊行の戦略」、国文目白、50号、2011年、pp.53-62.
- 7) 高瀬真理子「宇野千代、雑誌『スタイル』に見る諸問題―(一) 創刊から昭和十二年まで―」、歌子、23、2015年、pp.33-41.
- 8) 青木淳子「雑誌『スタイル』初期にみる宇野千代のきもの美意識」、語学教育研究論叢、第34号、2017年、pp.221-236.
- 9) 和田博文は、『改造』1936(昭和11)年8月号掲載の「スタイル社長」という短文に「きれいなお洒落情報を！－日本版の『ボーグ』の意気です」とあることから、『スタイル』はファッション雑誌であるとしている。(和田博文『資生堂という文化装置 1872-1945』岩波書店、2011年、pp.382)
- 10) 石川綾子『日本女子洋装の源流と現代への展開』家政教育社、1973年、pp.169-174.
- 11) 井上雅人「日本における「ファッション誌」生成の歴史化－『装苑』から『アンアン』まで／『ル・シャルマン』から『若い女性』まで－」、『都市文化研究』Vol.12、2010年、pp.125-138.
- 12) 坂本佳鶴恵『女性雑誌とファッションの歴史社会学－ビジュアル・ファッション誌の成立』新曜社、2019年、pp.51-52.
- 13) 昭和8年(1933)12月に兵庫県において月刊誌『ファッション』が創刊された。昭和10年(1935)に『ル・シャルマン』、昭和11年(1936)に『装苑』が創刊されている。
- 14) 高橋晴子 前掲書、p.117.
- 15) 『朝日新聞』1935年8月31日
- 16) 井上雅人 前掲書、p.128.
- 17) 今和次郎「スタイル・ブックの普及」(初出時のタイトル「板に付いた洋装」『シャルマン』1935年9月)『服装研究』ドメス出版、1972年 p.169.
- 18) 今和次郎「スタイル・ブック」(初出時のタイトルは「スタイルブックの話」『日本読書新聞』1937年4月21日)『服装史』ドメス出版、1972年、pp.346-347.
- 19) 宇野千代 前掲書、pp.91-92.
- 20) 『スタイル』第1巻第1号、p.32.
- 21) 『スタイル』第1巻第2号、p.40.
- 22) 『スタイル』第1巻第3号、p.40.
- 23) 『スタイル』第1巻第1号、p.1.
- 24) 『スタイル』第1巻第1号、p.32.
- 25) 笹尾佳代、前掲書、p.39.
- 26) 矢野目源一(1896-1970) 詩人・翻訳家。『スタイル』では、化粧に関する記事を多く書いており、スタイル社から『化粧読本』を出している。
- 27) 原奎一郎(1902-1983) 作家。英国滞在歴が長く、『スタイル』では紳士服に関するエッセイを寄せている。第1巻第2号に掲載された社告「スタイル第3号よりの分担編輯者－御紹介－」では、成富妙子と共に流行の担当者となっており、主に紳士服に関する編輯を担当したと思われる。
- 28) 和田博文『資生堂という文化装置 1872-1945』岩波書店、2011年、p.382.
- 29) 『スタイル』第1巻第2号、p.40.
- 30) 『スタイル』第1巻第2号、p.1.
- 31) 福島慶子 随筆家。画商で美術評論家である福島繁太郎夫人。
- 32) 宮川曼魚(1886-1957) 随筆家、鰻や「宮川」主人。
- 33) 森田たま(1894-1970) 小説家・随筆家。『スタイル』では毎号、和装に関する随筆を執筆している。
- 34) 赤羽喜一は、当時、東京美術学校図案科在学中の学生で、カルピスのポスター公募に入選し嘱託となる。『スタイル』では第1巻2号からカットを担当しており、第1巻6号、第7号の表紙画を担当している。
- 35) 『スタイル』第1巻第2号、p.23.
- 36) 『スタイル』第1巻第2号、p.40.
- 37) 松井翠馨(1990-1973) 活動弁士、漫談家。
- 38) 阿部(三宅) 艶子(1912-1994) 作家、評論家。『スタイル』には創刊時から深く関わっている。
- 39) 『スタイル』第1巻第4号、p.40.
- 40) 「QetR」は、Question et réponse フランス語で「問と答」であると第1巻 第5号の「QetR」において読者の質問に答える形で記されている。
- 41) 『スタイル』第1巻第4号、p.28.
- 42) 『スタイル』第1巻第5号、p.1.
- 43) 『スタイル』第1巻第5号、p.33.
- 44) 『スタイル』第1巻第5号、p.48.
- 45) 『スタイル』第1巻第6号、p.32.
- 46) 『スタイル』第1巻第7号、p.32.
- 47) 『スタイル』第1巻第6号、p.32.
- 48) 『スタイル』第1巻第6号、p.32.
- 49) 『スタイル』第1巻第7号、p.32.
- 50) 『スタイル』第1巻第7号、p.33.
- 51) 『スタイル』第1巻第7号、p.32.
- 52) 宇野千代、前掲書、p.91.

表1

	グラフィア						
	総頁数	表紙画	巻頭グラフィア	海外ファッション紹介	服飾雑貨その他	洋装	和装
第1号	32	藤田嗣治	「朝」 (マレーネ・ディートリッヒ)	「10A.M」 「スポーツドレス」 「午後」 「夜風に薫る」 「くつろぎ」	「銀幕より」		
第2号	40	藤田嗣治	「潮風」 (クレア・トレヴァ)	「潮風」 「浜の展望台」 「ピーチ・ウエア」 「散歩服」 「七月の日課」 「ばあてい」	「飾窓」	福島慶子 [撮影：福田勝治]	宮川静子 [撮影：福田勝治]
第3号	40	藤田嗣治	薩摩千代子	「そあれ」 「真夏の太陽」 「プロムナード」	「アクセサリ」	薩摩千代子	「深水に夏ものを訊く」 [撮影：福田勝治] 仲田菊代 [撮影：福田勝治]
第4号	40	藤田嗣治	桑野通子 [撮影：福田勝治] (第1回スタイル推薦衣裳)	「秋に咲く」 「どこにも花を」 「お嬢様お出かけ」 「月夜」	「この次のスタイル」 「九月の帽子」	水野葉子 野村小夜子 入江たか子 [撮影：福田勝治]	まり子 [撮影：福田勝治] 花柳寿美 [撮影：福田勝治] おはん せき弥 [撮影：福田勝治]
第5号	48	藤田嗣治	入江たか子 [撮影：名越辰雄]	「秋風に乗って」 「イヴニングドレス」 「ハリウッド女優」	「一つの着物に二つの靴を!!」 「特選売場」 「コドモの頁」	市川春代 堤真佐子 山田京子	小島みつ子 [撮影：名越辰雄] 梅菊 [撮影：福田勝治] 森千代 [撮影：名越辰雄] 河野綾子
第6号	48	赤羽喜一	崔承喜 [撮影：名越辰雄] (スタイル推薦衣裳2)	「そとで」 「ファイン・ポインツ」 「終林ベストドレッサー」 「或る日愉しく」 「土曜の朝」	「特選売場」 「流行の修正表」	「せによりた」 高杉早苗 [撮影：名越辰雄]	宇戸政子 [撮影：中山正一] 小金 [撮影：名越辰雄]
第7号	48	赤羽喜一	純英子 [撮影：名越辰雄] (スタイル推薦衣裳3)	「終林ベストドレッサー」 「Xマスイヴ」 「ファーえれがんす」「春遠か らじ」 「着遣からじ」 「冬の日は」	「ACCESSORY」	「せによりた」 Snap at Beauty Parlour	桑野通子 [撮影：林田武衛] 滝田菊江 [撮影：林田武衛] 草履七分下駄三分 玉長 [撮影：名越辰雄]